

狭山市美術家協会前代表 水村 昭(本名:昭一)氏のご逝去を悼んで

本年9月、水村昭氏の訃報が届いた。水村氏には当連合会の創設当初から大変貢献していただいております、特に第1回の芸術祭実施時には資金面での寄付をいただき、お蔭様で無事の開催に至ったことは当文団連にとって決して忘れることができない出来事である。以後、昨年度までの狭山市美術家協会の代表および当連合会理事を務められた。芸術祭には毎回ご自分の彫刻作品などを展示され、第19回芸術祭では実行委員長の役割も担っていただいた。温和なお人柄であったが、こと文化芸術に取り組む姿勢は厳しく、運営面での落ち度があると叱責を受けることもしばしばあった。

当連合会では本年度「名誉会員」を新設した。来年度の名誉会員に水村氏を推す声があった矢先の訃報であった。文団連のお目付役として、まだまだお元気でいていただきたかった。過去に本誌に寄稿いただいた文章を再掲し、水村氏を偲びたい。心よりご冥福をお祈りします。 狭山市文化団体連合会 会長 小川 忠史

若き日の美術開眼

水村 昭

私は終戦の年昭和二十年四月、当時は小学六年で受験した中等学校に入学し、戦後の学制改革で、二、三回校名が改称された高校までの六年間、川越へ通学した。現在は、博物館と美術館が建っている所に川商があった。



ミレー 子どもに食べさせる母親 (部分)

通学の通り道に趣味の店があつて、店先にいつもミレーの複製画が飾つてあつた。農家の入り口に幼児が三人腰かけ、可愛い口を開けた子に母親がスプーンで養っている絵である。柔らかい暖色系の画面には、優しい母の愛情がにじみ出ていて、とても魅力的な絵だつた。その前を通る度に、素晴らしさに心奪われたものだ。

また、当時出版された「洋画技法講座」なるものを取り寄せ、素描編、水彩編など食べるように読んだ。その図版で、確かシスレー(印象派の画家)の風景画に目が引き付けられた。モノクロ版ではあつたが、川面に輝く光の反映木々の葉と木漏れ日がゆらめく並木道が奥へと続く。そこには心地よい風が吹き抜けているが如きの絵であつた。

この二つの絵との出会いが、私の美術の道へ進む原動力になつていたと思う。

高校生になつた頃、市内の埼玉病院の敷地内に、彫刻家H先生がアトリエを構えて居られた。川高のI君、O君達と共に、放課後そこに通つて、デッサンの勉強を始めた。裸婦を描くのだが、初めて間近に視るその姿が眩しく、感動と同時に異常な興奮を覚えたことが想い出される。そこで、モデルを凝視して塑像に打ち込まれる先生の厳しい制作現場を目の当たりに出来たことは、得難い体験であつた。

そんなこんなで頭は常に美術のことではいっぱい。他の勉

強への意気は薄れ、惨たんたる成績にて卒業を迎える次第となつた。

美大に行きたい気持ちは強かつたが、家の事情もあつて断念。近くの農協に就職することにした。そのうち必ず受験するつもりで、より多く自分の時間を得ることを考えての選択だつた。

五時、勤務終了直ちに帰宅し、今まで怠けた分を取り返すべく、必要科目と石膏デッサンに励む一年が始まつた。

一方、杉並区善福寺町に、K画伯のアトリエで美術研究所が在るを知り、日曜日毎に通い出した。そこで学んだ事は覚えてないが、殆ど完成されているかのような作品に、入念に加筆して居られた先生の真剣な制作姿勢が強く印象に残つている。

一年経つた。待ちに待つて臨んだ芸大試験。だが力不足で失敗した。

来年を期して意を新たにす。務めを終えて、夕方からときには夜半まで、石膏像凝視の日々を重ね、万全を期して迎えた再度の挑戦。念願叶つた合格は、感極まつて忘れ難し。昭和二十九年三月の事であつた。

四月、音楽学部と一緒の奏楽堂での入学式の後、彫刻科I教室新入生十一名は、これから四年間の学び舎である天井がばか高くて広い部屋に集められた。教授、助教授、講師を囲んでの開講である。そこでのS助教授の言葉が忘れられない。「おまえ達は今、東京芸術大学に入つて、嬉しく思っているだろうが、そう思うのは大間違い。ここは東京芸術幼稚園である。云々」

何とも恐ろしい所へ来たもんだ。ここに、奥深い芸術探求の険しい入り口に立つ二十一才の私もいた。



(彫刻家 狭山市美術家協会代表 埼玉県美術家協会・同平和美術会・日本美術会々員)

註:写真と肩書きは平成二十四年執筆当時のものです